

## 安全保障と日米

Security, Military and Peace: The US and Japan

### ■分科会メンバー

中村真理\*  
栗原隆太郎  
齋藤友理絵  
柴田真也子  
山口寛明  
Yudai Chiba\*  
Ashley Hill  
Dillon Svec  
Michael Berlet  
Sho Igawa  
(\*は分科会コーディネーター)



### ■分科会概要

新日米安全保障条約の調印から50年。この間「日米同盟」の機能は変容し、1996年の「日米安保共同宣言」では、同盟の役割を「アジア太平洋地域の平和と安定の維持」と表明した。しかし東アジア地域には依然として多くの不安定要因が存在する。北朝鮮の核開発問題や中国の軍事的台頭、台湾海峡の有事などに対し、日米両国はいかに共同対処すべきだろうか。さらに近年では、国際テロや大量破壊兵器などの新たな脅威をめぐり、国際社会における日米同盟の機能と役割の拡大が求められている。「テロとの闘い」やイラク復興支援など世界規模での課題を抱える米国と、日本はいかに平和憲法との整合性を維持しながら同盟の役割分担を果たし、グローバルな安全保障に寄与するパートナーシップを築けるのか。

当分科会では、アジア太平洋地域の安定のみならず国際社会の平和構築をも見据えた日米協働の可能性を検討することで、現在、そして将来における「日米同盟」の在り方を問う。

### ■事前活動

#### 1. 春合宿

日時：5月3日(月)～5月5日(水)

場所：代々木オリンピックセンター

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

「安全保障と日米」分科会の議論は、「安全保障とは何か」「『安全保障と日米』の意味するところとは」など、分科会テーマそのものについて意見を出し合っていくことから始まった。その過程において、各人がこのテーマに興味関心を抱くようになった経緯や印象的な経験、現在持っている安全保障観なども語られ、充実した議論をするために互いを理解していくという点でも良いスタートとなった。次に、議論を整理するため、安全保障の主体、手段、目的、分野などいくつかの項目を設け類型化していくことを行った。2日目にして夜中の2時まで粘ったこの作業の中で、uni-Lateral、日米同盟のbi-Lateral、multi-Lateralなど形態を整理したり、軍事に限らない経済、環境、食糧など多岐に及ぶ安全保障の分野を確認したりすると共に、知識や意見の相違を探ることと、共通に理解している点を浮かび上がらせることが、多少なりとも出来たように思う。また、同日に設

けられた留学生とのRTセッションでは、覚えたてのTやCのサインを使いながら協力して核問題に関する英語での議論を乗り切り、各々が課題を認識しつつも、本会議へ向けた準備の第一歩とすることができた。最終日には各人が特に興味を持つトピックを改めて確認し合い、核問題(山口、柴田)、地域的安全保障、東アジア共同体(栗原)、日米同盟、沖縄基地問題(齋藤)をそれぞれ挙げた。その上で事前活動の進め方やフィールドトリップ案を話し合い、参加者全員の前でのRT発表や他分科会参加者からのフィードバックなどを経て、春合宿を終えた。個人的には、4日間の選考合宿で実行委員が悩み抜いた分科会メンバー全員が揃い、目の前で言葉を交わしているということが大変感動的で、一生忘れられない時間となった。

(中村 真理)

## 2. 孫崎享様(元外務省国際情報局長、元防衛大学校教授)

日時：6月6日(日)

場所：孫崎様御自宅

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

2010年6月6日、JASC Heritage(同日開催)に講演にいらしていた元・外務省国際情報局長であり防衛大学でも教鞭をとられていた孫崎享先生のご自宅に伺い、勉強会を開いていただいた。孫崎先生は前・鳩山政権の普天間基地移設問題に関するブレインの一人であっただけでなく、『日米同盟の正体 - 迷走する安全保障 -』という本を執筆されており、21世紀を迎えて新たな局面を迎えている日米同盟に対し、ご自身の確固たる見解を持っている方である。Heritageの講演でも日米関係や沖縄基地問題について触れられていたが、孫崎先生のご自宅に分科会メンバーのみでお伺いしたので、さらに深くお話を聞くことができ、個人の興味分野に関する質問も投げかけることができた。

興味深かったのは、孫崎先生が日米同盟に関するご自身の見解を、他者と一線を画し孤立的であることを自覚している、とおっしゃったことである。日本外交の一貫性の無さと戦略の無さを指摘

し、また、同時に米国の問題点も指摘しつつ、日本の将来を真正面から考えたときにどうすれば良いのか、私たちも真剣に考えていかねばならないということを説いてくださった。

最後に、最も印象的だったのは、孫崎先生が、国際政治に限らず学問を深めていく上で最も大切なのはたくさんの書物を読み、自分が抱く疑問や考えと同じようなことを述べている学者がいないか探してみることだ、とおっしゃっていたことだ。私は国際政治に見られる負の連鎖を断ち切ることは可能なのか、ということ聞いたが、そうすると先生はローマ時代の学者の話をしてくれた。彼が同じようなことを指摘しているからだという。先人に学びつつ、自らの思考力を鍛えることで、今後について考えていく力がつく、というお言葉には、深く感銘を受けた。(柴田 真也子)

## 3. 中国、韓国からの留学生との意見交換

日時：6月9日(水)

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

参加者：栗原、齋藤、中村、山口

中国及び韓国からの留学生が、アジア地域の安全保障について、また日米の同盟関係についてどのように考えているのか、率直な意見を聞くことを目的として、慶應義塾大学の授業に参加させていただき意見交換を行った。

日本に来ている留学生が日本語で発言しているため多少のバイアスがかかってしまっているかもしれないが、今現在の日本に対する私達世代の留学生の感情は概ね好意的で、日本がリーダーシップを発揮しつつ東アジア地域の安全保障に貢献していくことに拒否反応を示す学生はいなかった。また、彼らは日米関係が東アジアに直接どのように平和をもたらしているかということについてはあまり考えた事がなさそうであったが、日米関係が中国の台頭などにより悪化することには懸念を示していたように感じた。少なくとも良好な日米関係が自国に対して悪影響を与えるという考えを持っている学生はいなかった。

そんな中で、彼らが口を揃えて言っていたのは、

## 第4章 分科会活動

「私達の世代では日本を好きな人が多いけれど、祖父母や両親の世代になると話が違って来る。」ということであった。今後「東アジア共同体」といったものを構築し、平和と安定を東アジア、ひいては世界にもたらす可能性を探るならば、歴史認識問題、戦後賠償・補償問題や教科書問題といった過去の日韓、日中関係に起因する問題をいち早く解決していく事が重要になってくると改めて感じた。

東アジア諸国の間に存在する様々な問題を一気に解決することは難しい。その状況を改善する為には山積みの問題にプライオリティをつけ、一つ一つ片づけていくことが一番の近道なのではないだろうか。そのプライオリティをつける際のヒントをこのフィールドトリップは与えてくれた。今後の私達の活動に活かしていきたい。(栗原 隆太郎)

### 4. 防衛大学在校生とのディスカッション

日時：6月11日(金)

場所：防衛大学校

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

第62回会議公式の事前活動である防衛大学校研修に、分科会毎に防衛大学在校生を交えたディスカッションの機会を設けた。当分科会では、防大を代表し、市川学生が、以前に世界各国の士官候補生が集まる会議でも行ったという「日本の平和構築活動について」をテーマとしたプレゼンテーションを、そして防大側の分科会リーダーを務めてくださった大門学生が「自衛隊の海外派遣について」のプレゼンテーションしてくださった。その後、日米学生会議を代表して、また過去2年間防大生として日米学生会議防衛大研修に参加してきた齋藤が、「沖縄基地問題」についてプレゼンテーションを行い、プレゼン後に全員での討論の時間を設けた。これらを通して特に印象深かったことが二点ある。一つ目は、防大生が発表してくれた自衛隊の海外派遣について、彼ら中にも、自分達が国際社会に貢献しているという確固とした誇りが感じられたことであり、「派遣国の人々は、復興支援を受けながら『日本の自衛隊である』ということや、その立場をきちんと認識しているのか、またその上で、自衛隊に対しどの様な

感情を抱いているのか」という質問に対して、「自衛隊が、現地住民との距離を縮めるために、車両で移動する際に自衛隊員から市民に手を振る‘うぐいす嬢作戦’などの工夫を重ねていることで、支援を受けている現地の人達は日本の自衛隊を認識し、日本の自衛隊に対して感謝している」とまっすぐに答えてくれたことが印象的であった。二つ目は、その一方で自分達の意見や安全保障観を醸成し、さらにそれを人前で発表するというところに、ある種の躊躇いの様なものが感じられたことである。「考えを持つということ以上に、戦地へ行けば僕達には tool としての役割が期待される」「だからこそ、将来私達の user となり得る皆さんには、日本の安全保障について、自衛隊ができることとできないことについて、しっかり勉強し、考えてほしい」といった彼らの言葉は、私を含む他の分科会メンバーをはっとさせ、重くのしかかったのではないだろうか。

(中村 真理)



写真：防大生の皆さんとの懇親会で

### 5. 納家政嗣様(青山学院大学国際政治経済学部教授)

日時：6月12日(土)

場所：青山学院大学青山キャンパス

参加者：栗原、齋藤、柴田、中村、山口

青山学院大学において、青山学院大学教授、一橋大学名誉教授の納家政嗣教授に勉強会を指導していただいた。参加者それぞれの関心に基づいて、安全保障に関係する様々な事柄について質問した。栗原は東アジア共同体について、柴田は核問題について、齋藤と私からは自衛隊や沖縄の在日米軍問題につい

て質問がなされた。

東アジア共同体に関しては、包括的な地域共同体をアジアにおいて形成することは難しく、イシュー（問題）別の二国間・多国間制度を並列的・重層的に形成することがより現実的であるとの指摘がなされた。

核問題に関しては、特に核不拡散体制について話し合われた。先生は、NPT という制度だけで対応していくのは核不拡散を達成していく上で難しいという指摘をされた。というのも、イランや北朝鮮といった国々がその制度に上手く組み込まなければ、他にどのような国々が加盟していても機能しないからである。制度の重要性は高いが、そのほかに六カ国協議などにより政治的対応が必要であるということであった。また、破綻国家などからテロリストに核開発技術を渡らせないために、その国の社会の安定性を確保し、国境を越えないように「水際」での対策がなされる必要がある、という指摘もなされた。

自衛隊に関しては、現在のように日本人の軍事忌避が根強くなった歴史的経緯の解説がなされた。曰く、確かに湾岸戦争を受け、PKO 法の改正といった新しい動きも見られた。しかし、反軍備派と左翼的な考えとが結びついたことによって、自衛隊の在り方を保守的に考える人がなお多いという。在沖繩米軍基地に関しては、海兵隊や基地の移動は難しくとも、訓練の一部を他県に分散させる可能性は必ずしも否定できないとの考えが示された。以上の他にも多くの指摘がなされ、安全保障という広い問題を扱う分科会へ、本会議の下地となる見識をいただいた。貴重な時間を割いていただいた教授に感謝する。（山口 寛明）



写真：納家先生を囲んで

## 6. 五百旗頭真様（防衛大学校長）

日時：6月30日（水）

場所：防衛大学校

参加者：齋藤、柴田、中村、山口

沖縄研修の2日後、防衛大学校にて、学校長である五百旗頭先生をお招きして勉強会を開催した。はじめに、日米関係について先生に講義をしていただいた。日米関係は、幕末にペリーが来航し条約を締結した時代には友好的な関係であったが、その後、日本の対露戦争における仲裁役を米国が務め、事実上の同盟国となる。満州事変後は日本による南進とアジアにおける排他的進出があり、日米関係は、パートナーでありながらもライバル関係へと変容していった。そして太平洋戦争に際して、この関係は破局を迎え、アメリカの産業力に対する知識のないまま、日本は「竹槍3千本でアメリカに勝てる」と豪語し、敗戦に至った。

現代の日米関係については、常にマイナスのイメージを引きずっている日本の安全保障に対して、鳩山政権はある意味でのコンセンサスを生んだ、とした上で、沖縄県の米軍基地について「最低でも県外」としたことは、「総理として罪深き行動」であった、と指摘された。そして、沖縄県にはどうしても地政学的宿命というものがああり、日本が経済的負担をしてでも、基地を維持しながら県の危険と騒音を減らす、というアプローチをしていく必要がある、とおっしゃっていた。「現在の日本の安全保障は、アメリカ抜きでは到底成り立たない。アメリカと協調しながら、日本独自の平和構築活動を模索していく必要がある、『侵略をしない』という態度を示すためにも、自衛隊の存在は必須である。日本の復興支援活動は高い評価を得ており、国内的制約の伴うものであったとしても、国民にとって充実感を実感できる活動をしていくべき」と強調されていた。

五百旗頭学校長のお話はとても興味深く、その後の質疑応答は学生からの積極的な質問で盛り上がりを見せた。お忙しい中勉強会を開いてくださった先生、本当にありがとうございました。

（齋藤 友理絵）

## 第4章 分科会活動



写真：五百旗頭先生を囲んで

### 7. 伊勢崎賢治様 (東京外国語大学教授)

日時：7月5日(月)

場所：東京外国語大学

参加者：柴田、中村、他分科会希望者

2010年7月5日、東京外国語大学で教鞭をとられている伊勢崎賢治教授にお話を伺った。伊勢崎先生は国連でもその手腕を発揮され、国連の武装解除オペレーション(DDR)を、東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタンで率いた実績をお持ちであり、ご自身を「紛争屋」と称している方である。今回は、沖縄の基地問題や、国連の内実についてお話を聞くことができた。

伊勢崎教授は、実務経験をお持ちの教授であり、ご自身が武装解除を指揮してきた国の状況や、国連が内包する問題を丁寧にお話して下さった。沖縄問題に関してご自身の見解を述べて下さり、ご自身が沖縄に行つて講演をされた話から、日米安全保障条約は日本が不利な内容になっているが、日本が逆に優位な立場をとり、他国と不平等な同盟を結んでいる事実がある、ということをご指摘されていた。

伊勢崎先生ご自身もおっしゃっていたが、安全保障という国際政治の分野は、アカデミックな面のみにとらわれず、実際の現場の話を聞くことも非常に重要である。現場経験がある教授のお話を聞けたことは、非常に有意義であった。

(柴田 真也子)

### ■本会議中の活動

第一サイトインディアナでは、分科会メンバー

8人が事前に英語で作成したレポートを共有し、各レポートの内容に関して討論を行った。テーマは以下の通りである。

・日本側参加者

1. The imperativeness of strengthening US-Japan alliance and nurturing East Asia community building to keep a much sustainable and prosperous region(栗原)
2. Okinawa Problem(齋藤)
3. The Future of the US-Japan Security Alliance: Strengths and Challenges in Working Towards a Global Partnership(柴田)
4. The Balance between Policy-making and Democracy: The Problem and Future of American Air-Base Issue in Japan(山口)

・アメリカ側参加者

1. A US-Japan Alliance for the 21st Century: The US-Japan Alliance and Addressing Transnational Challenges (Ashley)
2. The Issue of the Constitution of Japan in Concern to the Regional Stability of Asia(Dillon)
3. Japan's Re-emerging Military Identity (Michael)
4. Addressing Terrorism and Piracy in Southeast Asia: Extended Possibilities for Cooperation between the US and Japan (Sho)

第二サイト Washington, D.C. では米国の安全保障政策を司る主要機関にアプローチが可能である地の利を生かし、フィールドトリップを多数行った。沖縄基地問題や自衛隊の国際貢献の可能性、トランスナショナルな脅威への対処、といった分科会で議論を進めていた問題について、現地の国務省や日本大使館、シンクタンクで日々それらの問題を扱っている専門家の講義を受け彼らの見解を学ぶ機会は非常に有意義であった。また、分科会の議論の方向性にも助言をいただくことができた。

第三サイト及び第四サイトでは、ファイナルフォーラムの準備に焦点を移していったが、発表項目や方法論のコンセンサスを取ることに苦勞し、それまで進めてきた議論を深めることに集中でき

なかったことが反省点として挙げられる。

最終サイトサンフランシスコでのファイナルフォーラムでは、当分科会はそれまでの議論を踏まえ「沖縄基地問題」「JSDFについて」「東アジアの安全保障」の3部構成の発表を行った。

(中村真理)

## ■本会議中のフィールドトリップ

### 1.Center for Strategic and International Studies 訪問

-Nicholas Szechenyi, Deputy Director and Fellow, Office of the Japan Chair

日時：8月4日

著名なシンクタンクである米戦略国際問題研究所 (CSIS) を訪問しお話を伺った。

アメリカのアジアにおける外交政策の基軸として、アジア諸国と結んでいる同盟が最も重要であるという点を強調されていたとき、「アメリカの経済とアジアの経済のために」とおっしゃっていたことが非常に印象に残っている。アメリカのシンクタンクである以上「アメリカのため」という視点が入るのは至極当然であろうが、相手国の国益や発展に関して、はっきりと言及されていたことが興味深かった。同時に、対日本の外交政策の中で、表向きだけではない「日本のため」の理由がどれ程あるのだろうかということも感じた。

また、今後更に難しくなっていくであろう米中関係と米朝関係に関して、中国には“Engage, but hedge”，北朝鮮には“Engage, but pressure”という政策のもとアプローチしていくべきだとおっしゃっていた。たった三語で、非常に分かりやすく且つ印象に残る言葉で今後の政策のテーマを表現されたことに感銘を受けた。

普段は日本の立場から考える事の多い東アジア、日米関係を、アメリカの専門家の視点から捉えるきっかけになったという点で、大変貴重な経験であった。

(栗原 隆太郎)

### 2. 国務省 (Department of State) 訪問

-Joseph R. Donovan, Jr., Principal Deputy

Assistant Secretary, Bureau of East Asian and Pacific Affairs,

-Kevin K. Maher, Director, Office of Japan Affairs

日時：8月6日

分科会として国務省を訪問し、上記二氏にお話を伺うことができた。

まず Joseph Donovan 氏より、「日米同盟」の現状について講義をしていただいた。「Foundation for security in East Asia」として最重要視していると述べた上で、とりわけ日本における米軍基地の重要性について、横須賀の Navy 7th Fleet(米海軍で唯一国外に基地を持つ空母戦闘群)など日本を拠点とする米軍部隊の例を挙げ、冷戦時はソ連へのプレッシャーとして、そして今日では東アジア域内の緊急事態に素早く対応するために、欠かせぬものであるとおっしゃっていた。一方で、現在沖縄の基地の数や訓練を減らす努力もしており、住民への負担軽減に努めながらも軍として技量が衰えないようバランスをとることが大事であると強調されていた。他に、「同盟」と「関係」の違いについて (alliance vs. relationship)、二国間関係を保つ文化交流の重要性について、など沢山の興味深い指摘をいただいた。

続いて Kevin Maher 氏より「日米同盟」の地理上の利点について、中国及び旧ソ連から日本を捉えた特別な地図を用いて講義をしていただいた。冷戦時はソ連から太平洋への水路は津軽海峡と日韓の間のみであり、これらが維持できればソ連は太平洋側で身動きがとれなかったということ、また、三沢基地はソ連に、岩国は平壤に最も近い米空軍基地であり、与那国と台湾間が一時間強であることも加えて、朝鮮及び台湾に関わる作戦のロジスティクスは全て日本が拠点となることなど、米国から見た日本の地理的重要性を、具体的な事実と共に強調されていた。一方で、日米間ではより多様な協力関係が可能であるにも関わらず、基地問題のみが注目を集めているのは残念であると述べられ、自衛隊の予算不足や現在の米国の国防対策の難点など、基地問題に加え両国が解決すべき様々な問題を指摘されていた。

## 第4章 分科会活動

最後に、お二人にはここには書ききれない沢山の論点とご指摘をいただいた。日米学生会議分科会を快く受け入れてくださった二氏、そして当日まで調整を進めてくださったBrian Brendel氏に日本より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(中村 真理)

### 3. 納富中様(米国防衛駐在官)

(Mitsuru Nodomi, Major General, JGSDF; Defense and Military Attache)

日時：8月6日

場所：日本大使館

ワシントン滞在中、Security Forumに駆けつけてくださった納富陸将補であったが、後日、RTメンバー全員を大使館にお招きしてくださった。思いがけない大使館再訪問であり、25年先輩の活躍する姿は、私にとって非常に励まされるものであった。防衛駐在官‘Attache’は、大使館付きの武官であり、駐在国の軍事情報を合法的に調査する外交特権を持っている。

初めに現在の国際安全保障環境について説明をしていただき、その後質疑応答を行った。私は、現在の日本国民の安全保障観について質問をしたが、「安全保障に対する日本国民の意識は変わった。もはやタブー視する風潮はなくなってきているのでは」という回答が印象的であった。特に自衛隊については、毎日のように自然災害などに対応しており、海外での活動においても、武器使用の制限がかえって地元の人々との交流を促進させているとおっしゃっていた。今後「制約」をどうしていくべきかということを探ると、「まさに日本の安全保障上の大きな問題であり、米国の見方は大事だが、日本自身がどのように決定をしていくのが重要である。日本が、何をしていきたいのか、どの様にしていきたいのかを自分で考え、自分の言葉で発信できるようになればよい。別の言い方をすれば、日本の考え方、国益が米国の考え方、国益と100%一致しないのは当然であり、外交や安全保障対話を通じて、最大公約数を見つけ、それを大きくしていく努力を重ねればよいのではな

いか」という回答をいただいた。

お忙しい中貴重なお話を聞かせてくださった納富様、どうもありがとうございました。

(齋藤 友理絵)

### ■分科会参加者の声

「安全保障と日米」分科会のメンバーとしてJASCに参加できたことは、多くの点で幸運でした。まず、RT内に留まらない議論が可能であったこと。また、そのトピックは自分が専門として修めてきた分野と密接に関連していたこと。そして、有能で啓発的なRTリーダー、メンバーに恵まれたことです。

いわば国家関係の根幹にある当RTのトピックは、参加者全体から強い関心と呼ぶものでした。沖縄研修や米国国務省訪問等のフィールドトリップは常に、RTを超えた議論を可能にしてくれました。

また、それは国際関係論を学ぶ自分にとって大きな意味を持つ経験でもありました。安保改定五十周年というこの年に、皆と知識を分かち合い、共に考え抜いたことは、私の安全保障への興味関心、理論的視座を根本的に改めるほどの影響がありました。

しかし、何よりの財産はやはり「人」との交流にあります。春合宿では、互いにどのような学問的興味・視点があるのかという探り合いの段階であったように思います。しかし、事前活動での語りや(特に米国参加者とは)本会議を通じ、それら学問的関心が、それぞれの人生、それぞれの強さ、弱さとリンクしたものとして捉えられるようになりました。より大きな視点で互いを認め合えるようになったことは、RTに方向性を与えました。

米国の参加者の意見は、意外にも日本の立場に始めから理解を示すものであり、驚きました。そういった意味では、典型的な米国側対日本側、といった構図でなく、むしろ個人間での意見の不一致、または共鳴が印象に残りました。

安全保障というテーマは重く、繊細です。それ

ゆえに、それぞれが自分をさらけ出さなければ議論ができません。しかしだからこそ、互いを完全に受容はできずとも理解することはできる。認め合える。それは final forum という最終発表会に向けて不可欠な過程であり、異文化や他者の理解という意味でも多くの点で示唆的でした。

(山口 寛明)

### ■分科会コーディネーター総括

今までの日米学生会議において、そして勿論様々な場面において議論され続けてきた「安全保障と日米」というテーマ。日米安保改定 50 周年という節目の、そして基地移設問題が連日報道されたこの年に、改めて両国の学生が議論をし、さらにそれを発表するという事は、非常に難しい挑戦であったと感じている。

形として残る具体的な成果は、当分科会の意義は、と問われるととっさには答に窮してしまうことも事実である。しかし、一人一人が知識、見識を深めようと文献と格闘し、専門家に熱心に質問し、限られた知見の中で勇気を持ち発言をした姿、そして互いに相手の立場や背景を尊重し、辛抱強く耳を傾けた姿に現段階では価値を求め、今後も日米関係の中を歩んでいきたいと思っている。



また、国務省でのレクチャーにあった様に、「人と人のつながり」が両国の直面する問題を改善する一助となり得るならば、当分科会はそれを辛抱強く醸成していける素晴らしいメンバーに恵まれた。この場をお借りして一人一人に感謝を伝えたい。

真っ直ぐな姿勢で知識や経験を吸収し、持ち前の明るさと、皆の意見や気持ちを的確に代弁してくれる英語力で、何度も分科会を救ってくれた隆太郎。専門の国際政治の知識とその熱意によって、常に議論に深みを与えてくれる欠かせない存在だったアキ。パキスタンをはじめ様々な海外経験から生まれた大きな夢と共に参加し、その他者理解への態度から多くのことを学ばせてくれたマヤ。JASC 史上初の防衛大からの参加には、100km 歩行直後の合宿参加など困難も多々伴ったけれど、全てを笑顔で飄々と乗り越えてくれた友理絵。そしてアメデリの皆と、RT パートナー Yudai。みんな本当にありがとう！

最後になりますが、当分科会にご協力をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

(中村 真理)

